宇和海の魚類(1)—ヨウジウオ科

辻 幸 一※

はじめに

宇和海は，四国西南部に位置し，南からは黒潮の影響を受け，北は佐田岬半島で瀬戸内海と隔てられた海域である。海岸は多くの半島や湾，島が入り組み，変化に富んでいる。そこに生息する生物は多様で種類も多く，特に魚類については，多くの種が知られている。宇和海の魚類相については，大植ほか（1953）が渭南海岸から264種を，安永（1962）が宇和島市内の魚市場から251種を報告している。両報告を総合すると，368種記録されている。

筆者は，宇和海の魚類に興味をもち，河口感潮域と沿岸浅海域を中心にして魚類調査を行っている。現在までに，岩松川河口感潮域から45種（辻 1983），室手海岸から141種（辻 1985）を報告した。ここでは，採集した魚種のうちから興味深い種を紹介してみたい。

調査地の概要と方法

図1 宇和海と調査地点

調査は，河口感潮域およびタイドプールで行った（図1）。海水域では，三瓶町周木（1978年に1回），吉田町奥浦（1978年に1回），御荘町室戸海岸（1981～1985年に23回）の3か所で，SCUBA潜水調査を行った。河口感潮域では，三瓶町三島川河口（1978年）と津島町岩松川河口（1979～1984年）で，タモ網による採集を行った。タイドプールでは，宇和島市堂崎海岸と御荘町室手海岸で1984年にタモ網による採集を行った。

種の同定と学名およびその配列はすべて益田ほか（1984）に従った。

魚類の紹介

1. ヨウジウオ科ヨウジウオ亜科の魚類

ヨウジウオ科は，ヨウジウオ亜科とタツノオトシゴ亜科に分けられる。宇和海からは，ヨウジウオ亜科の魚類を7種確認している。表1にその学名と採集域を示した。

ヨウジウオ類の特徴は，次のような点である。体は細長く，真皮性の骨板よりなる体輪で包まれている。口は小さく斜位につき，歯がなく，管状の吻で餌を吸引捕食する。背鰭は1基で腹鰭はなく，臀鰭は痕跡的についている。雄の腹部には育児のうがあり，卵を保護する。近縁のタツノオトシゴ類との違いは，尾鰭があることと，尾部で物に巻きつくことができない点である。

表1 宇和海のヨウジウオ亜科魚類 ※河口感潮で採集

Syngnathidae		
Doryrhamphus japonicus Araga et Yoshino	ノコギリヨウジ	
Oostethus brachyurus brachyurus (Bleeker)	テングヨウジ	※
Hippichthys spicifer (Ruppell)	カワヨウジ	※
Parasyngnathus argyrostictus (Kaup)	ガンテンイシヨウジ	※
Syngnathus schlegeli Kaup	ヨウジウオ	
Corythoichthys hoematopterus (Bleeker)	イシヨウジ	
Halicampus danckeri (Chabanaud)	ホソウミヤッコ	

※愛媛県立宇和島東高等学校

① ガンテンイショウジ

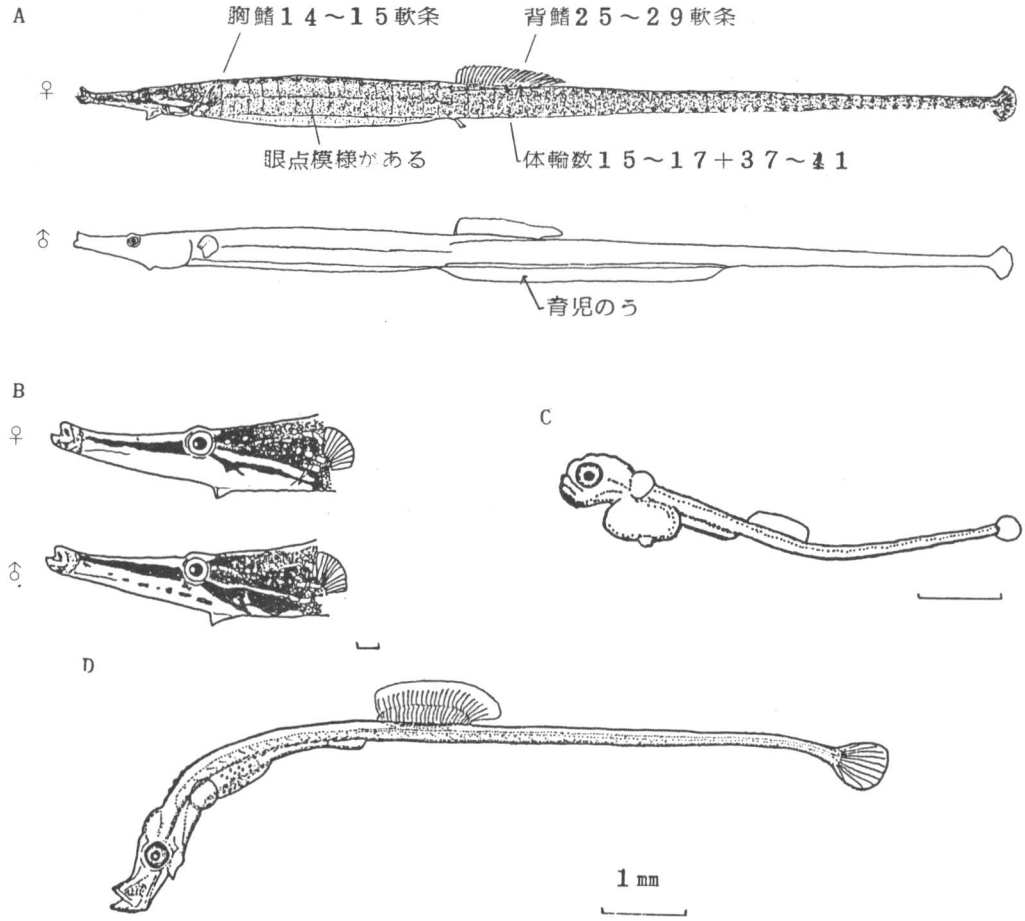

図　2　ガンテンイショウジの形態
A　成魚（♀，♂）　B　頭部の違い（♀，♂）　C　仔魚　D　稚魚

本種は，岩松川河口感潮域に生育している。成魚では体幹部に多数の眼点模様が存在するのが特徴である。体長は15cm程度で，雄の成魚の尾部腹面には育児のうがあり，卵や仔魚を完全に包み込むことができる。頭部の模様は雄雌で差がみられ，雌の方が頬部下側の黒線が細く，その間の白線がよく目立つ（図２のB）。分布は，和歌山県以南である。

本種は１９７９年から１９８４年までの間に全部で43尾を採集された。その採集時期は表２に示すように，３月から９月の間で，春から夏に多く出現している。１９８２年５月に採集した成魚を水槽で飼育していると，６月にその中の１尾の雄魚の育児のうに卵を保護しているのを

表2　岩松川河口のガンテンイショウジの月別採集尾数変化

年＼月	3	4	5	6	7	8	9
1979			1				
1980				1	1		
1981			6	5		3	4
1982	1		4	9		2	
1983		採	集	せ	ず		
1984		5					

見つけた。やがて6月15日に，稚魚が育児のうから泳ぎ出てくるのが観察された。図2のCに，育児のうに保護されている仔魚を示した。まだ卵黄があり，頭部が大きく，体を曲げて育児のうの中に重り合っていた。図2のDには，育児のうから泳ぎ出た直後の稚魚を示した。すでに口も完成し，体も細長くなり，成魚に近い形になっていた。稚魚は頭を上にして縦になって背鰭を使って泳いでいた。

本種については，前報（辻，1981）ではBombonia sp. カワヨウジ属の1種と報告したが琉球大学理学部の瀬能宏氏の同定によりガンテンイシヨウジであることがわかった。また，本種の学名は，前報（辻，1983）では Syngnathus argyrostictus Kaup としていたが，Dawsonにより，Parasyngnathus argyrostictus (Kaup)と変更されたので，これに従った。

② ホソウミヤッコ

本種は，1984年8月26日に，室手海岸の水深5～10mの海底で，3尾採集された。その体長は，128～140㎜で，雄魚1尾，雌魚2尾であった。吻は著しく短く，その背面の中央隆起線は澎出し，上縁に細かい鋸歯がある。また，体の各隆起線は平滑で棘や小突起はなく，背鰭基部は隆起しないことなどが特徴である。

本種は，益田ほか（1980）が未同定種として報告しているものとよく一致していた。その後，益田ほか（1984）によって，ホソウミヤッコ（新称）と同定されたので，それに従った。分布は，日本からは，和歌山県田辺湾と徳島県宍喰となっており（益田ほか1984），宇和海からの記録が新たに加わったことになる。

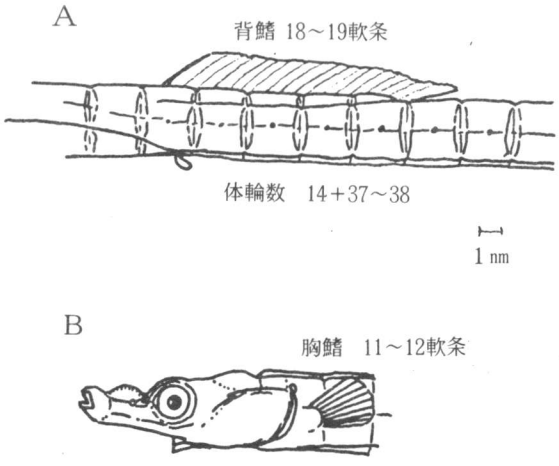

図3. ホソウミヤッコの形態
A 体幹部と尾部の隆起線の状態
B 頭 部

（以下次号）

文 献

益田 一・荒賀忠一・吉野哲夫，1980：魚類図鑑—南日本の沿岸魚，東海大学出版会，東京，382 PP

益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫，1984：日本産魚類大図鑑，東海大学出版会，東京，450 PP

大植登志生・伊藤猛夫・森川国康・沢田允明・村上節太郎・豊田英義・八木繁一・影浦 勉，1953：渭南海岸：45－61，愛媛県土木部都市計画課

辻 幸一・1981：岩松川河口域のハゼ科魚類相調査，昭和55年度愛媛県科学技術教育研究集録，：30－39，

――― ・1983：岩松川感潮域の魚類，淡水魚，9：90－91，

――― ・1985：宇和海室手海岸の魚類相(1)，昭和59年度愛媛県科学技術教育研究集録，

安永正雄・1962：宇和海の魚類，愛媛の自然，4(1)，愛媛県立博物館